

KUWA BARA SITE

桑原遺跡

庄内中学校校舎建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002年3月

宮崎県都城市教育委員会



遺跡遠景（上方：霧島山 下方：庄内川 遺跡は中央）



遺跡中遠景（下方：庄内川 遺跡は上方）



遺跡全景（西側から）



遺跡全景（真上から）



D-E-F-3 区南壁土層



同 上



C-2 区南壁土層

序 文

この報告書は、都城市立庄内中学校校舎建て替えに伴い、都城市教育委員会が受託事業として実施した都城市庄内町字桑原に所在する桑原遺跡の発掘調査報告書であります。

平成12年4月から8月にかけて実施した発掘調査の結果、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が発見されました。

当遺跡の周辺には、都城島津家初代北郷資忠が文和年間に創建したと伝えられる庄内（安永）諫訪神社・応仁二年（1468）都城島津第六代北郷敏久によって築城されたとされる安永城址や庄内古墳群・菓子野地下式横穴墓群・他多数の遺跡、寺院・神社跡があり、当地域は歴史的にみても重要な意味合いをもつものと思われます。

本書は、失われていく貴重な文化財の記録保存を目的として作成しました。本書が、郷土の歴史研究材料および学校教育の教材として活用されることを願っています。

最後に、発掘作業に従事していただいた作業員の方々をはじめ、学校関係各位、関係機関の皆様方に心よりお礼申し上げます。

平成14年3月

宮崎県都城市教育委員会

教育長 長 友 久 男

例　言

1. 本書は都城市立庄内中学校（都城市庄内町8976番地）校舎建て替えに伴い、平成12年度に実施した桑原遺跡発掘調査の報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図は、現地での実測を吉村則子・阿久根敏江の助力を得て下田代清海が行い、製図は下田代清海が行った。
3. 本書に用いた方位は、注記のないかぎり座標北G.N（國土調査法第Ⅱ座標系）を指している。
4. 遺構・遺物の写真撮影は、下田代清海が行った。
5. 空中写真撮影は、九州航空株式会社に委託した。
6. 本書に掲載した遺物実測図は、雁野あつ子・水光弘子・奥利根子が作成し、下田代清海が墨書きした。
7. 土層断面及び土器の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に拠った。
8. 本書の執筆は、第Ⅰ章第1節を矢部喜多夫が、第Ⅰ章第2節・第Ⅱ章・第Ⅲ章・第Ⅳ章を下田代清海が行った。本書の編集は下田代清海が行った。
9. 本書に用いた略記号は次の通りである。

KUWA — 桑原遺跡 SC — 土坑 P — 柱穴 SE — 井戸
SK — 炉跡

10. 出土遺物・写真・図面記録等は、都城市文化財整理第1・2分室および都城市文化財収蔵庫に保管されている。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
1 調査に至る経緯	1
2 調査組織	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2
第Ⅲ章 調査報告	
1 調査概要	4
2 遺構	7
3 遺物	10
第Ⅳ章 小結	
1 まとめ	27
2 あとがき	28

挿図目次

第1図 周辺遺跡位置図	2
第2図 桑原遺跡周辺地形図	3
第3図 桑原遺跡グリッド配置図	4
第4図 桑原遺跡土層断面図・基本層序図	5
第5図 遺構配置図	6
第6図 SE01・SE02遺構実測図	8
第7図 SC01・SC02・SC03・SK01遺構実測図	9
第8図 繩文土器・石器実測図	11
第9図 軽石製品実測図	11
第10図 弥生土器実測図(1)	12
第11図 弥生土器実測図(2)	13
第12図 土師器(古墳)実測図	14
第13図 土師器(古代)実測図(1)	16
第14図 土師器(古代)実測図(2)	17
第15図 土師器(古代)実測図(3)	19
第16図 製塙土器実測図	19
第17図 須恵器実測図	19
第18図 土師器(中世)実測図	21
第19図 中世陶磁器実測図	21
第20図 近世陶磁器・瓶実測図	23

図版目次

第1図版 調査前全景・表土剥ぎ風景・瓦礫除去風景	31
第2図版 SK01検出状況・SK01土層断面・SK01完掘状況	32
第3図版 第IV層内土器出土状況・遺構検出状況	33
第4図版 遺構検出状況・SC02完掘状況・SC03半掘状況	34
第5図版 SE01土層断面・SE01完掘状況	35
第6図版 SE02土層断面・SE02完掘状況	36
第7図版 掘載遺物(1)	37
第8図版 掘載遺物(2)	38
第9図版 掘載遺物(3)	39
第10図版 掘載遺物(4)	40

表目次

表1 掘載遺物観察表(1)	24
表2 掘載遺物観察表(2)	25
表3 掘載遺物観察表(3)	26

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成11年11月15日付けで、都城市教育委員会教育総務課より同文化課に都城市庄内町8976番地ほかにおいて庄内中学校校舎改築における遺跡の有無について照会がなされた。同課では試掘の必要があると回答し、具体的な日程の協議をはじめた。

試掘調査は平成11年11月30日から12月1日において実施した。試掘内容は5つのトレンチを設定し、御池ボラ層上面まで掘り下げ、遺跡の確認を行った。結果、近世・古代・弥生及び縄文時代の土器・陶磁器等と黒色土の落ち込みを確認した。

試掘結果をもとに、改築により遺跡の破壊を受ける部分約400m²について発掘調査を行い記録保存の措置を講ずることで協議を詰めた。調査は整理作業を含め平成12年4月から9月の6ヶ月間で行い、報告書作成を翌年度行うことで合意を得た。

2. 調査組織

平成12年度（発掘調査・整理作業）

調査主体	都城市教育委員会	教育長	長友 久男
調査総括	都城市教育委員会文化課	課長	内村一夫
	同上	課長補佐	盛満和男
	同上	文化財係長	堀之内克夫
庶務担当	同上	文化財係主査	矢部喜多夫
調査担当	同上	嘱託職員	下田代清海
調査作業	東前利雄・鶴松雄・荒ヶ田安夫・東春雄・曾原主吉・上野利則・木村七郎・阿久根トシエ・吉村則子・荒ヶ田エダ・松原ヨシ子		
整理作業	雁野あつ子・水光弘子・奥利根子・久保美佐枝		

平成13年度（報告書作成）

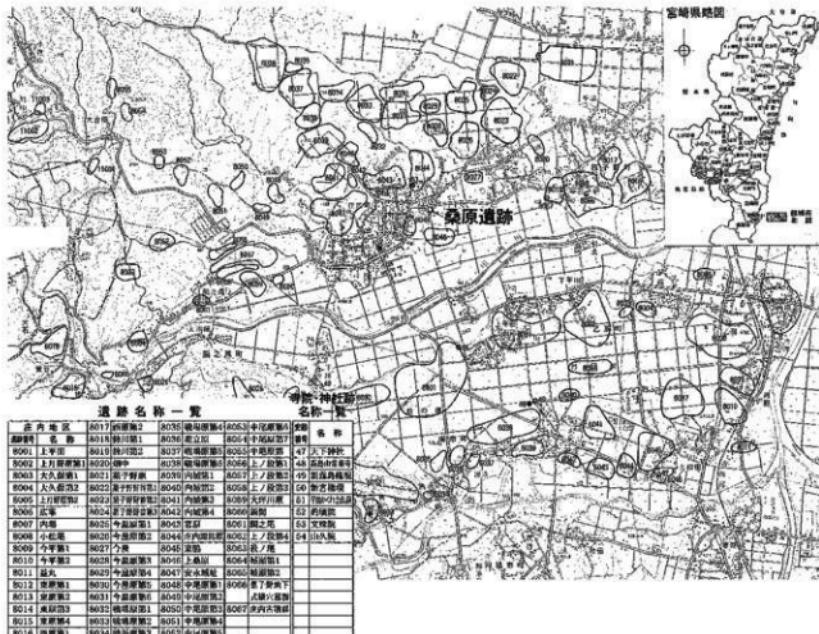
調査主体	都城市教育委員会	教育長	長友 久男
調査総括	都城市教育委員会文化課	課長	内村一夫
	同上	課長補佐	坂元昭夫
	同上	文化財係長	奥田正幸
庶務担当	同上	文化財係主査	矢部喜多夫
調査担当	同上	嘱託職員	下田代清海

第II章 遺跡の位置と環境

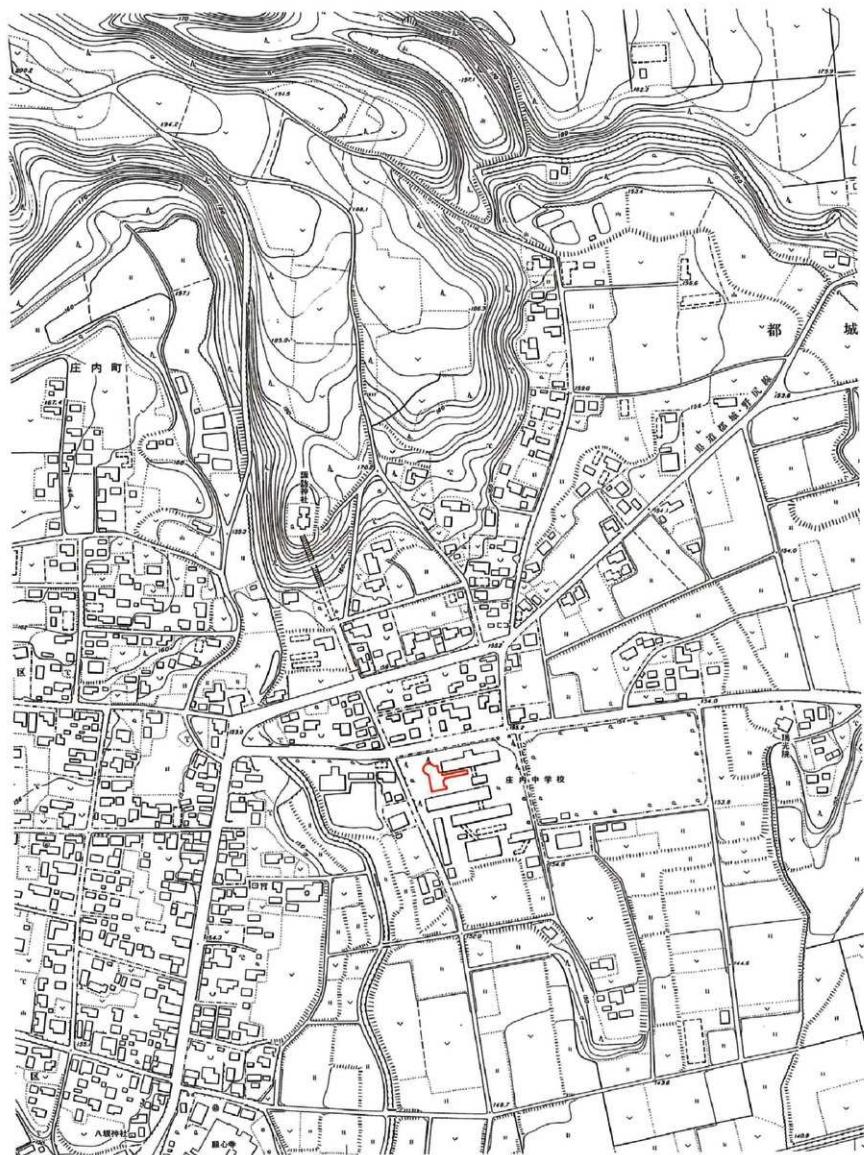
桑原遺跡は、宮崎県都城市庄内町8976番地都城市立庄内中学校の敷地内に所在する。

都城市は行政的には、宮崎県の西南端にあり、北西に霧島山系、東から南を鰐塚山地に囲まれ、西南方向のみがわずかに開かれた都城盆地の中心に位置し、大淀川が各支流を集めながら、市の中央を貫く形で南から北へと流れている。当遺跡は、大淀川支流の一つである庄内川北岸の河岸段丘上標高約154mに立地し、北方には舌状台地が張り出している。

遺跡周辺の歴史的環境に目を向けると、北方約400mの台地の上に庄内（安永）諏訪神社がある。この社は、都城島津家の初代北郷資忠が文和年間に創建したと伝えられており、現在でも地域住民の厚い信仰を集めている。また南側には上桑原遺跡（8046）が隣接している。当遺跡は、昭和49年に実施された土地改良事業によって大部分が破壊を受けその際、縄文時代から中世にわたる幅広い年代の遺物が多量に出土している。その一部は、都城市教育委員会に保管されている。東方約1.2kmには、庄内古墳群（現況はすべて削平されている）が、東方1.5kmには、菓子野地下式横穴墓群があり、また西方約1.0kmの丘陵台地上には安永城址がある。この安永城は、4つの曲輪で構成され、応仁二年（1468）都城島津第六代北郷敏久の築城とされ、この後一度は伊集院氏が支配するのであるが、慶長四年（1599）に起きた庄内の乱後、再び北郷氏が治めるところとなるのである。このように、この地域は歴史的にも重要な意味合いを持つと思われる。



第1図 周辺遺跡位置図(1/50000)



第2図 桑原遺跡周辺地形図 (1/5000)

第III章 調査報告

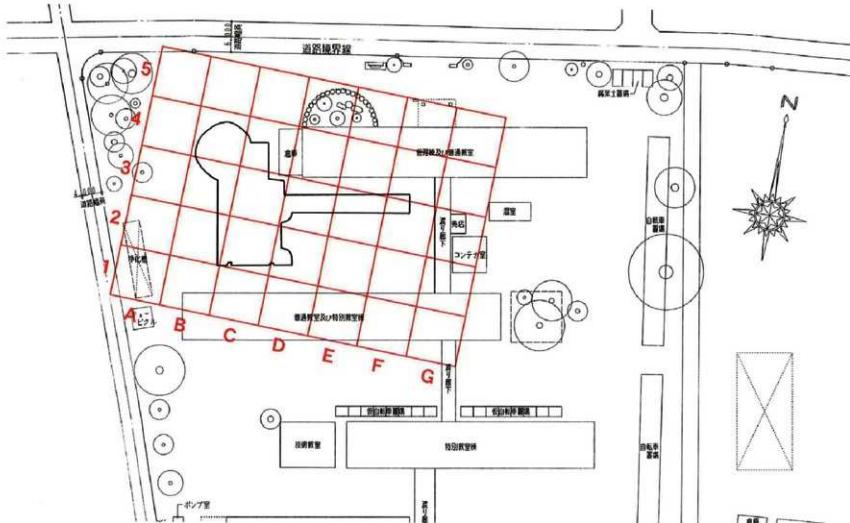
1. 調査概要

本遺跡は、標高約154mの河岸段丘上に立地する庄内中学校の校内に所在する。

まず調査を始める前に、現場の安全管理・確保をはかる為ガードフェンス設置をおこなった。調査は、試掘調査で得られたデータを基にし、人力にて表土（第I・II層）を除去した。その際、一部重機も使用した。現在では表土剥ぎは調査期間短縮の為、重機にて行うのが一般的なのであるが、調査区が校舎に隣接しており授業等学校業務に支障をきたさぬよう配慮した結果、人力によることになった。調査区の大部分がテニスコート場ということもあり、非常に固く転圧されており、表土剥ぎは困難をきわめた。第IIa層と第IIb層は学校建設前の現代水田耕作土であり、両層の間に酸化鉄の集積層がみられたため乾湿田であったと思われる。表土を剥ぐと、旧木造校舎のコンクリート基礎ブロックや校舎を壊した際の瓦礫を埋め込んだゴミ穴があちこちにでてきた。それらは、人力ではどうにもならない事、御池ボラ層中まで影響がおよんでおり遺構も残存し得ない状況であった事を考慮し、そのままの状態で調査を進めた。次に第III・IV・V・VI層（遺物包含層）を掘り下げた。結果、縄文時代から近世までの遺物が各層で混在して出土した。第III・IV・V・VI・VII層各上面で遺構検出をおこない、第III層上面で石囲い炉1基、第VII層上面で井戸2基・土坑3基・柱穴群が検出された。第VII層上面を最終調査面とした。

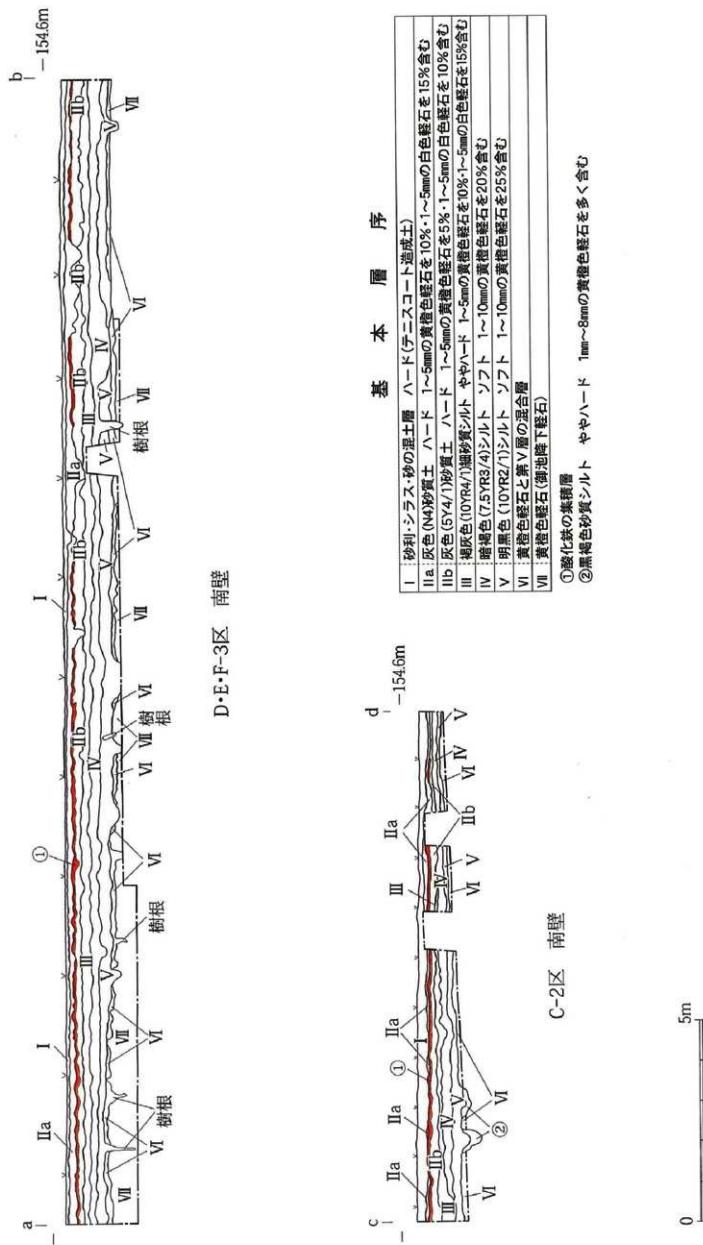
調査記録の為、第II座標系に乗じた10mグリッドを設定し、便宜上南から北へ算用数字1、2、3、…、西から東へアルファベットA、B、C、…でグリッドを呼称した。

調査期間中、7月18日には庄内中1年生3クラス99名を対象に、現場説明会を行った。



第3図 桑原遺跡グリッド配置図 (1/1000)

第4図 桑原遺跡 土層断面図





第5図 遺構配置図

2. 遺構

ピット群 約200コを検出、それらを半掘し、埋土別に、A群（埋土が第Ⅲ層）・B群（埋土が第Ⅳ層）・C群（埋土が第V層）の3つのグループに分けた後、完掘した。形状などから樹根跡と思われる穴も多数混在しており、建物跡及び規格性をもった列びを見いだすことはできなかった。相対的な新旧関係は、古い順に、C群→B群→A群となる。ピット内から遺物はほとんど出土せず、A群については、埋土などから近世と思われる（第Ⅲ層内出土の遺物は主として近世）。B群・C群については、時代の特定をするまでには至らなかった。

土坑 SC01 長径約1.2m・短径不明・最大深さ約0.2m（いずれも検出面基準）を計る。平面プランは橿円形である。出土遺物はなかった。埋土は第V層单一である。用途・時代共に不明。

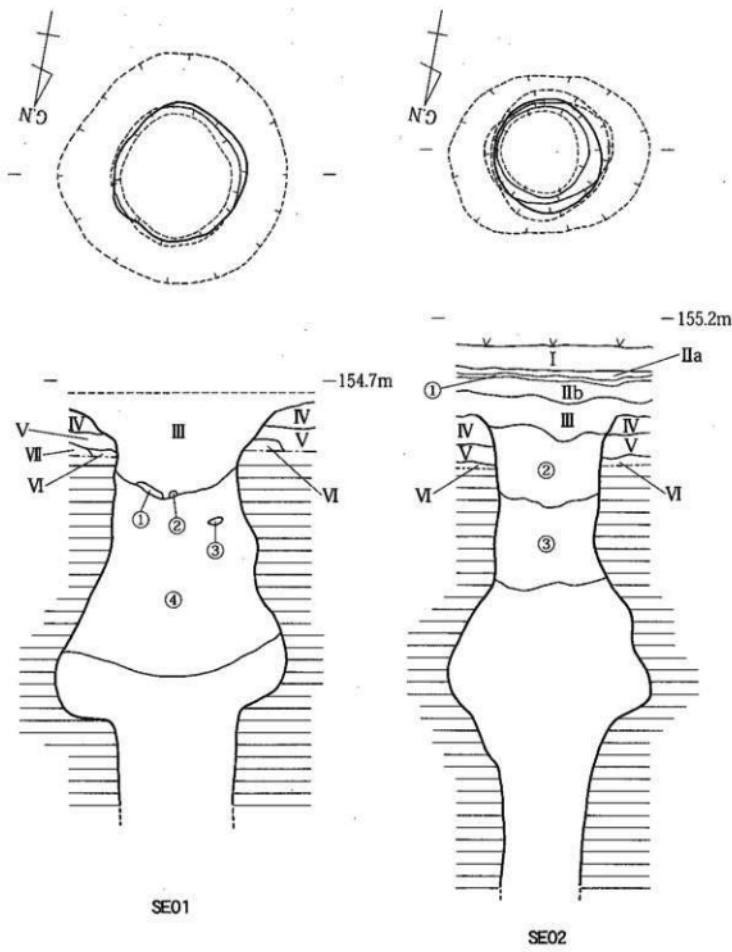
土坑 SC02 長径不明・短径約1.0m・最大深さ約0.45m（いずれも検出面基準）を計る。平面プランは不定形と思われる。埋土は第V層单一である。出土遺物は弥生土器片が1点。用途・時代共に不明。

土坑 SC03 長径約3.6m（推定）・短径不明・最大深さ約0.6m（いずれも検出面基準）を計る。平面プランは不定形と思われる。掘りこみ面は第IV層上面である。出土遺物はなかった。用途・時代共に不明。

井戸 SE01 長径約1.2m・短径約1.0m（いずれも検出面基準）・最大深さは掘りこみ面から3.2m以上（崩落の危険性があり安全上これ以上の掘削を断念した）。平面プランはややいびつな円形である。断面形状が、一部袋状を呈しているが、これは遺構側壁が脆い御池ボラ層であった為、崩落したものと思われる。掘りこみ面は第IV層上面である。出土遺物は面取りをした輕石数点・古代土師顛片1点・砥石1点・薩摩焼片数点である。時代的には近世と思われる。

井戸 SE02 長径約1.0m・短径約0.9m（いずれも検出面基準）・最大深さは掘りこみ面から4.0m以上（崩落の危険性があり安全上これ以上の掘削を断念した）。平面プランはややいびつな円形である。断面形状が、一部袋状を呈しているが、SE01と同じ理由だと思われる。掘りこみ面は第IV層上面である。出土遺物は青磁（端反り口縁）片1点・土師底部（糸切り）片1点である。時代は埋土の状況などからSE01と同じく近世と思われる。

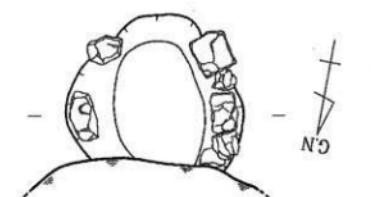
石囲い炉 SK01 長径約0.9m（推定）・短径約0.7m・最大深さ約0.2m（いずれも検出面基準）を計る。平面プランはやや橿円形である。穴の周囲に面取りをした輕石が組まれていた。一部、攪乱により破壊を受けているが、馬蹄状を為していたものと思われる。輕石に焼けた跡があり、埋土中に灰と炭が多量に含まれていた事から、炉跡と考えられた。また埋土中に粘土塊が含まれており、カマドの形態を呈していた可能性もあるが、残存状態から石囲い炉とした。出土遺物はなかった。時代的には、第Ⅲ層中に掘りこまれていた事から、近世と思われる。



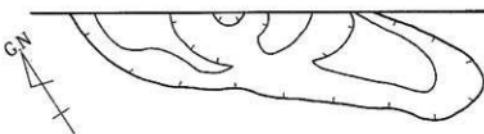
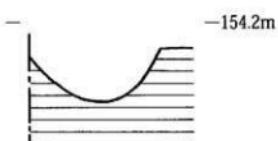
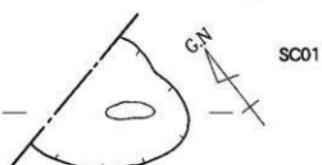
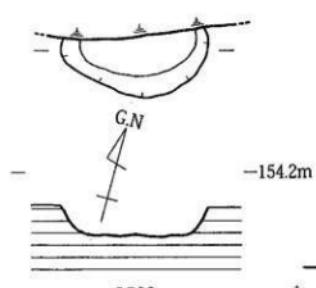
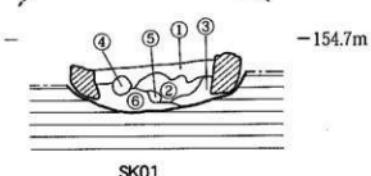
- ① 灰と炭の混合ブロック
- ② 炭
- ③ 灰色砂粒
- ④ 基本的にⅢ層と同じだが
やや暗く粘質性がある

- ① 酸化鉄の集積層
- ② 基本的にⅢ層と同じであるが白色軽石の混入量が少なく、御池ボラの混入量も少ない
- ③ 基本的にⅢ層と同じだがやや暗く粘質性が若干ある

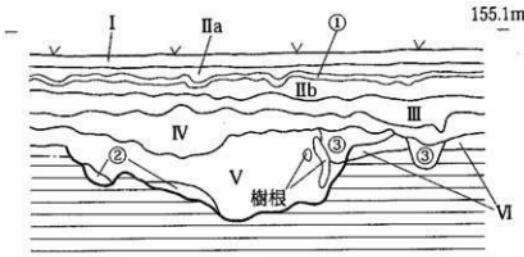
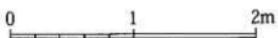
第6図 SE01・SE02 遺構実測図



- ① 第Ⅲ層と灰の混土層
- ② 灰と炭の混土層
- ③ 烧土・灰・炭の混土層
- ④ 粘土塊
- ⑤ 炭
- ⑥ ①と基本的に同じだが、灰の割合がやや少ない



- ① 酸化鉄の集積層
- ② 基本的にはⅢ層であるが黄
橙色軽石の含有量がやや多
く固くしまっている
- ③ 明黒褐色砂質土（1～10mm
の黄橙色軽石を多量含む）



第7図 SK01・SC01・SC02・SC03 遺構実測図

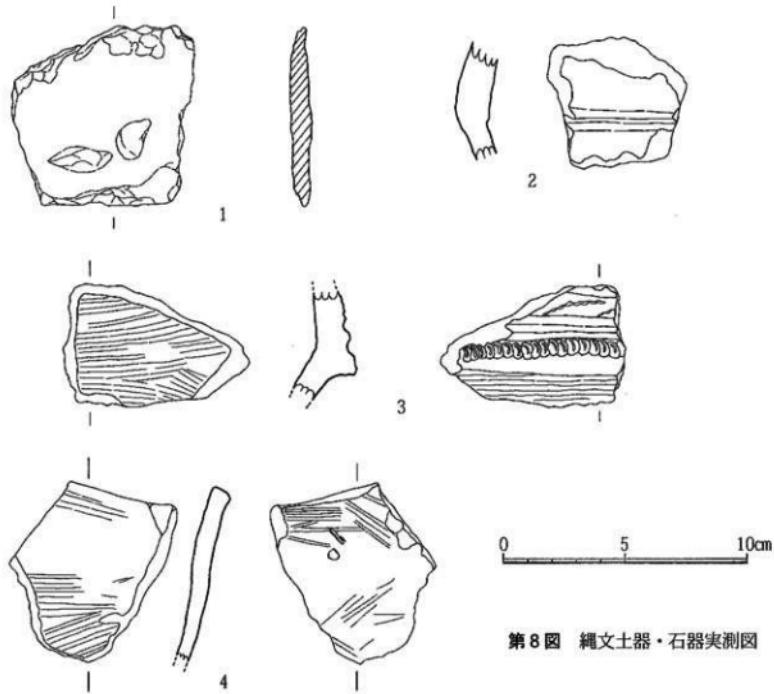
3. 遺物

縄文時代（第8・9図）

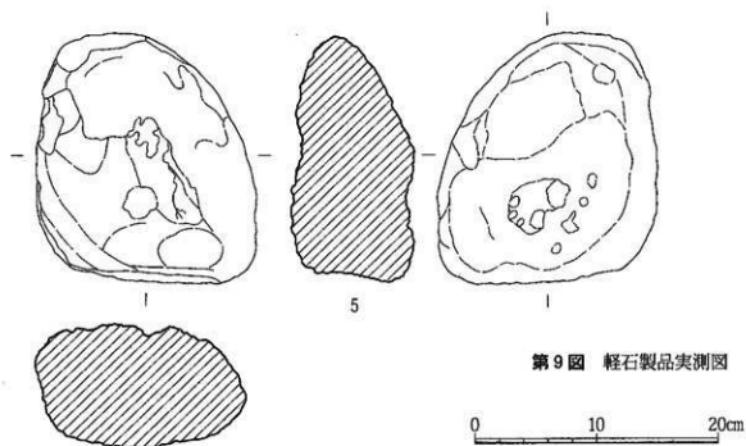
- 1 は剥離痕を残している事から石器とした。最大長・幅7.4cm、器厚8mmを計る。石材は不明である。器種については扁平打製石斧の可能性もあるが断定はできない。
- 2 は内器面はナデによって仕上げられ、外器面は沈線文が施されヨコナデによって仕上げられている。
- 3 は市来式土器であり、内器面は横方向の貝殻条痕のちナナメ方向の貝殻条痕により調整されている。外器面は隆帯部に貝殻刺突文・沈線文・爪形文を施し、下部は貝殻条痕により調整されている。
- 4 は縄文時代後期の波状口縁をもった市来式土器の口縁部片である。口唇部はヨコナデ、内・外器面は共にナナメ方向の貝殻条痕によって調整されている。また内・外器面の両方に炭化物の付着がある。
- 5 は軽石製品で長軸20.5cm・短軸18cm・最大厚10.2cmを計る。石の片面ほぼ中央部が長さ約10cm・幅約3.5cm・深さ約1cmの凹状に削られている。祭祀・儀式の際に使用した陰陽石と考えられる。

弥生時代（第10・11図）

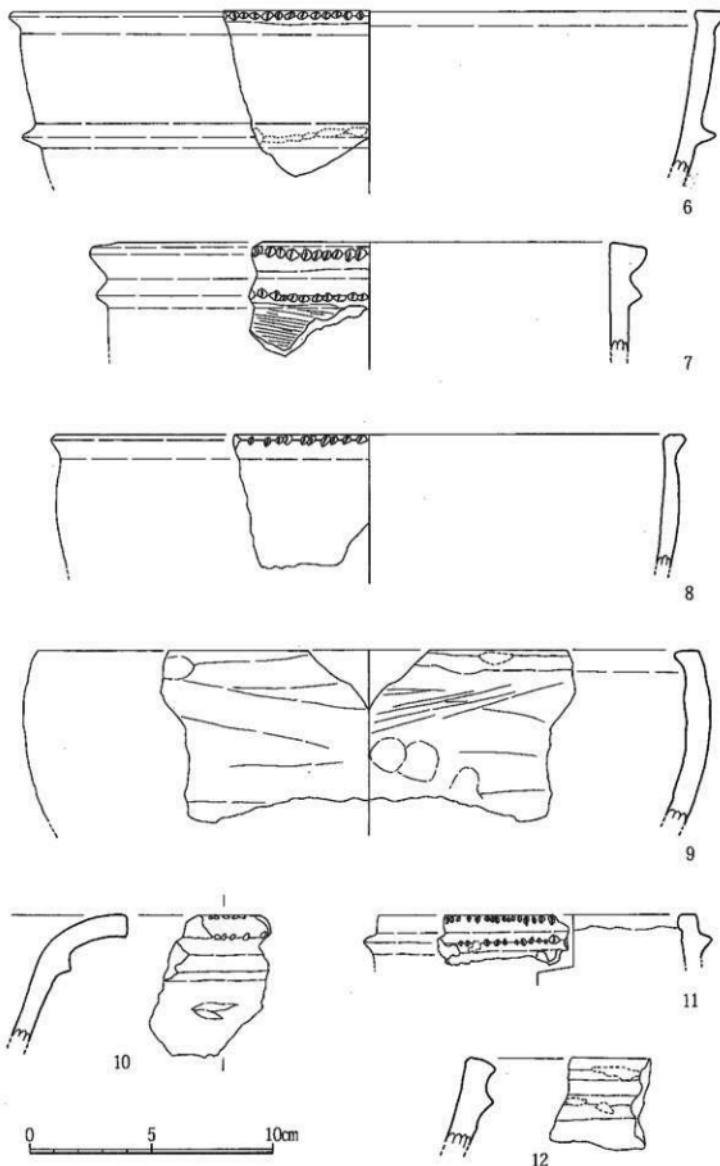
- 6 は甕の口縁部片で、口縁端部と胴部に二条の貼り付け突帯を持ち、口縁端部の突帯には指頭による刻みが施されている。胴部の突帯については全体が剥落しており、刻み目の有無は不明である。突帯と突帯の間は、ミガキによって仕上げられている。口縁端部の断面形状は、内側にやや肥厚しており、Tの字状をなしている。外器面にススの付着がみられることから、煮炊きに使用されたと考えられる。
- 7 は甕の口縁部片で、口縁部に二条の刻み目突帯をもち、外器面に横方向のハケ目痕が観察される。
- 8 は甕の口縁部片で、口縁端部に刻み目突帯をもつ。器面摩耗の為、調整痕は不明。
- 9 は外器面がミガキにより仕上げられ、内器面は不定方向のハケ目により調整され、指頭圧痕を残す。断面形状でみると口縁端部が内側に張り出した形をしている。
- 10 は甕の口縁部片で、外側にかなり反った形状をしている。口唇部の上側と下側に刻み目が施されている。その下方に突帯を一条めぐらせており、貼り付けた痕跡を明瞭に残す。口唇部と突帯の間はナデによって、その下部はミガキによって仕上げられている。
- 11 は甕の口縁部片であり、刻み目突帯が一条めぐっている。口縁端部にも刻み目が施されており、外器面はヨコナデにより仕上げられている。
- 12 は口縁部片で、口縁端部と直下に突帯がめぐる。突帯部分は一部剥落している。外器面の突帯間はヨコナデ、その下部はミガキによって仕上げられている。
- 13 は胴部片で、近接した二条の刻み目突帯がめぐり、外器面はナデにより仕上げられている。内器面の大部分は剥落している。
- 14 は胴部片で、貼り付け突帯が一条めぐり、外器面はミガキによって仕上げられている。内・外器面にススの付着がみられる。
- 15 は甕の胴部片で、近接した二条の刻み目突帯をもち、突帯の上部はヨコ方向のミガキで仕上げられ、突帯の下部はタテ方向のミガキによって仕上げられている。



第8図 縄文土器・石器実測図



第9図 軽石製品実測図

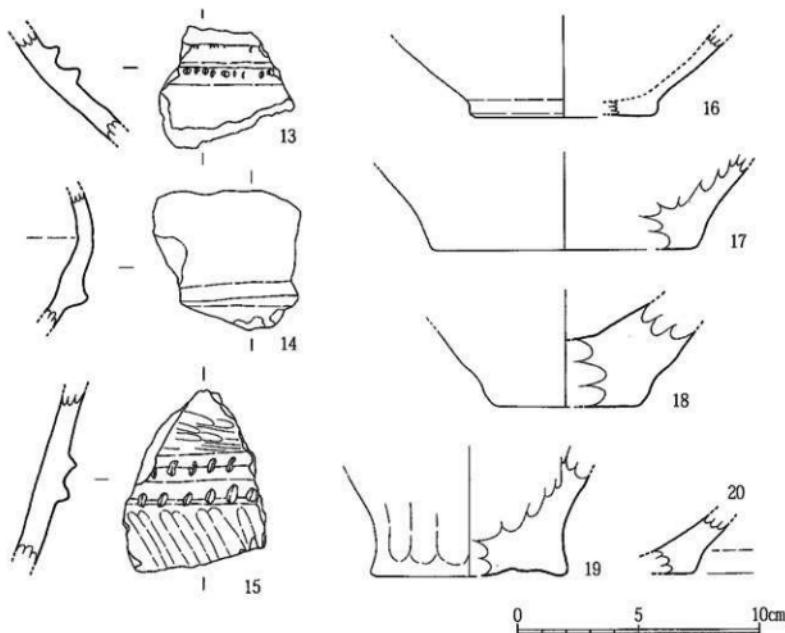


第10図 弥生土器実測図(1)

弥生時代（第11図）

- 16 は底部片で、やや外反し、上部底状である。外器面はナデによって仕上げられ、内器面は全体が剥落している。外器面には、ススの付着がみられる。
- 17 は底部片で、外器面は摩耗しているため調整痕は不明である。内器面は全体が剥落している。
- 18 は底部片で、外器面に調整による凹凸をのこす。内器面はナデによって仕上げられている。
- 19 は底部片で、下部が外側に張り出し、あげ底状である。外器面に指頭痕をのこす。内器面は全体が剥落している。
- 20 は底部の破片で、内・外器面共に摩耗のため調整痕等は不明である。

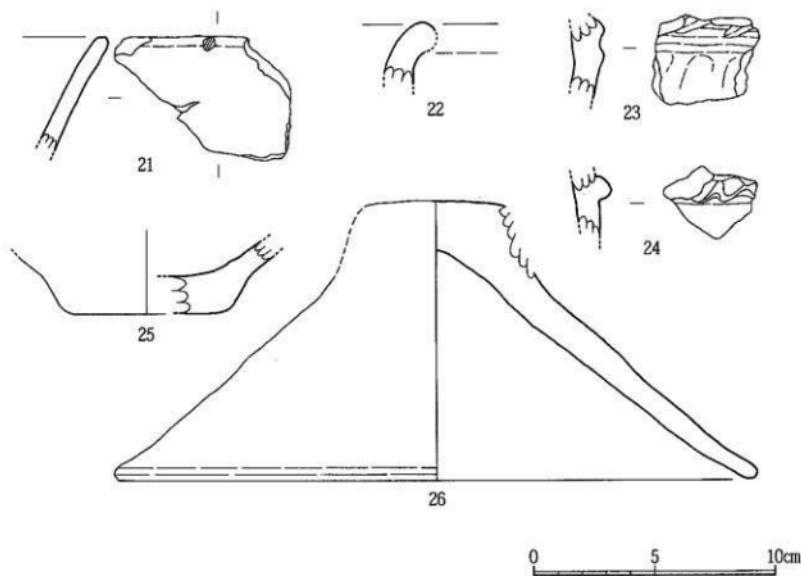
当遺跡で出土した弥生土器はおおむね、前期から中期におさまるものと思われる。6について、口唇部が水平で、口縁端部および刪部に突帯をめぐらすなどの特徴が、亀の甲タイプの甕に類似するが、通常タイプは器面調整がハケ目もしくはナデによって行われているのに対して、6はミガキによって仕上げられ、器形がやや丸みをおびているが、同様の遺物が、都城市大岩田村ノ前遺跡でも出土しており、同報告書の中で、「器形及び器面調整の違いは、他の出土土器の調整も含めて考えると、当地域の在地手法であるものと考えられる。」と述べられている。また、口縁端部内側の肥厚も地域におけるバリエーションのひとつではないかと考える。



第11図 弥生土器実測図(2)

古墳時代（第12図）

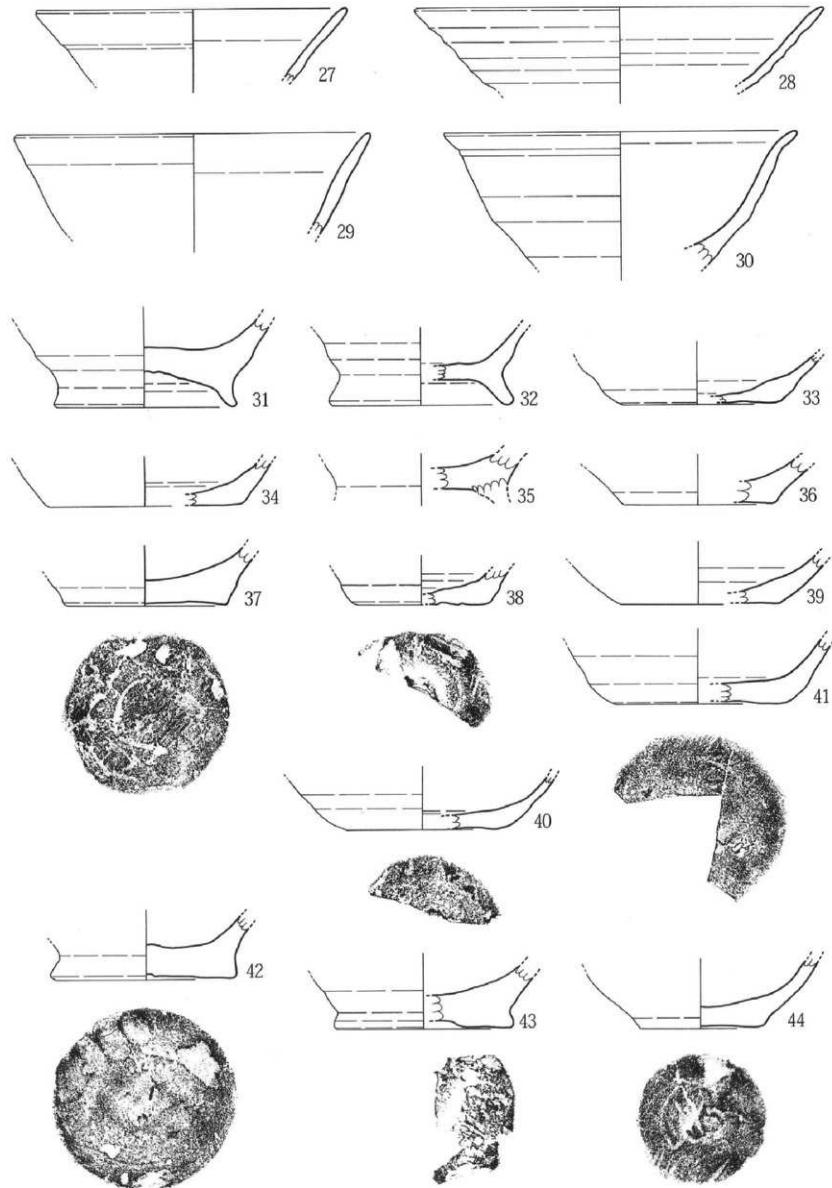
- 21 は口縁部の破片で内・外器面共に、ヨコナデによって仕上げられ、口唇部もナデによって仕上げられている。
- 22 は口縁部の破片で内・外器面共に、ヨコナデによって仕上げられている。端部が一部剥落している。
- 23 は外器面はナデによって仕上げられ、刻み目突帯文が一条めぐっている。
- 24 は突帯部部分の破片である。突帯には、刻み目が施され布目痕がある。また、貼り付けた痕跡を明瞭に残す。外器面にはススの付着がみられる。
- 25 は底部の破片である。内・外器面共に、ナデによって仕上げられている。底面のカドはかなり摩耗している。
- 26 は蓋の底部から口縁部までの破片である。外器面は工具によるナデによって仕上げられ、内器面は裾部がヨコナデで、その他の部分をナデによって仕上げている。ツマミ部分が一部剥落している。内器面には、炭化物の付着もみられる。



第12図 土師器（古墳）実測図

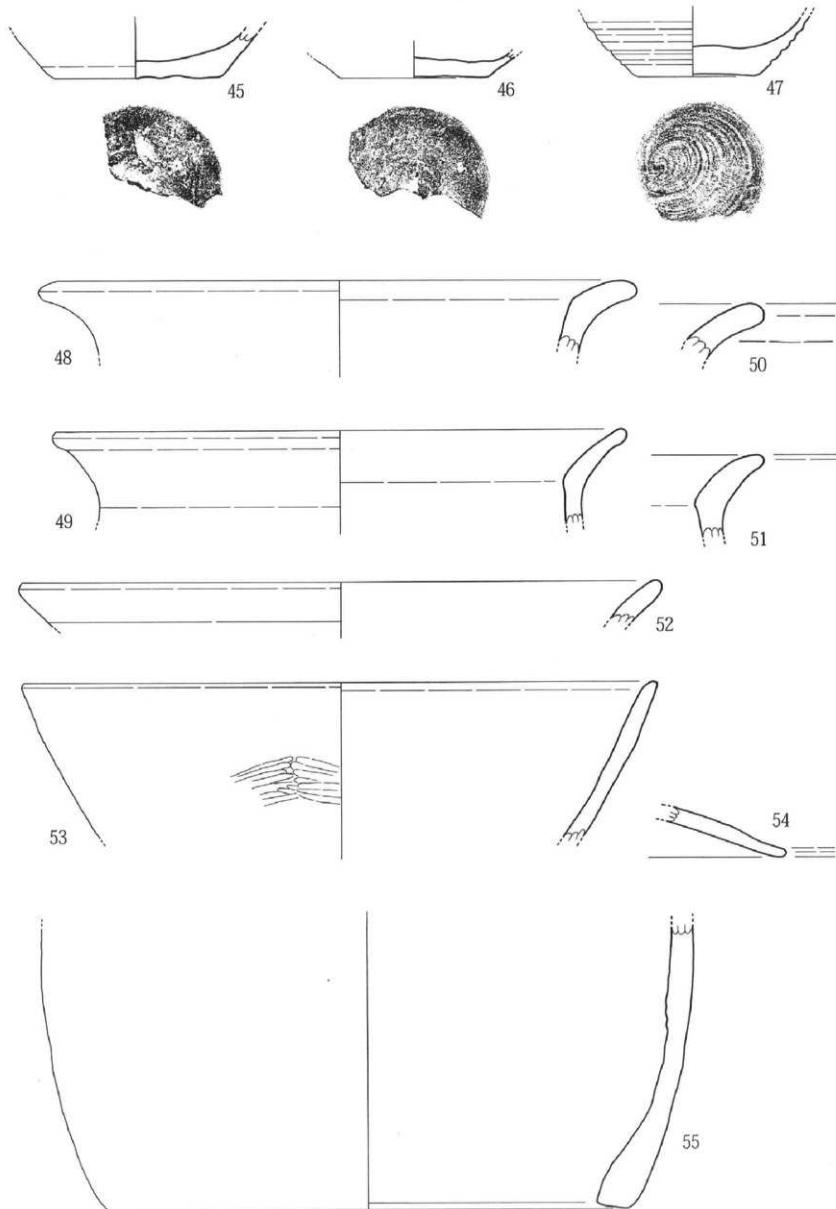
古代（第13回）

- 27 は壊の口縁部から体部にかけての破片である。内・外器面共に回転ナデによって仕上げられている。体部は直線的に開き、外面に段を有す。壊bに該当するものと考えられる。
- 28 は壊の口縁部から体部にかけての破片である。内・外器面共に回転ナデによって仕上げられ、特に外器面は摩耗しているが、回転ナデの痕跡を明瞭に残す。体部は直線的に開く。壊bに該当するものと考えられる。
- 29 は口縁部から体部にかけての破片である。内・外器面共に回転ナデによって仕上げられている。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや開く。
- 30 は椀の口縁部から体部にかけての破片である。内・外器面共に回転ナデによって仕上げられている。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外側に開く。椀aもしくは椀c2に該当するものと考えられる。（底部が欠損している為、いずれかは不明）
- 31 は高台付椀の底部片である。内・外器面共に回転ナデによって仕上げられている。底部外面は、ヘラ切り後、高台部分を貼り付け回転ナデにより仕上げられている。体部は直線的に立ち上がる。椀c1に該当するものと考えられる。
- 32 は高台部分の破片である。外器面は回転ナデによって仕上げられ、内器面は回転ナデのちミガキによって仕上げられている。底部外面も回転ナデにより仕上げられている。高台部のみの破片の為、器種は不明である。
- 33 は壊の底部片である。内・外器面共に回転ナデによって仕上げられている。底部外面の切り離し技法は、ヘラ切りである。内・外面共に摩耗している。
- 34 は壊の底部片である。内・外器面共に回転ナデによって仕上げられている。底部外面は切り離し後ナデによって仕上げられている。体部は直線的に立ち上がる。
- 35 は底部の破片で外器面は回転ナデによって仕上げられ、内器面は不定方向のナデによって仕上げられている。底部外面は回転ナデによって仕上げられ、高台の接合痕を残す。
- 36 は壊の底部片で内・外器面共に、回転ナデのちナデにより仕上げられている。底部外面はヘラ切り後、ナデによって仕上げられており、板状圧痕を残す。
- 37 は壊の底部片である。外器面は回転ナデのち横方向のナデにより仕上げている。また、底部から体部への立ち上がり部分が、ヘラ削りによって調整されている。内器面は回転ナデのち不定方向のナデによって仕上げられている。底部外面の切り離し技法は、ヘラ切りであり板状圧痕を残す。
- 38 は壊の底部片である。外器面は回転ナデのちナデによって仕上げられており、摩耗している。内器面は回転ナデにより仕上げられている。底部外面の切り離し技法はヘラ切りである。
- 39 は壊の底部片である。外器面は回転ナデによって仕上げられ、摩耗している。内器面は回転ナデによって仕上げられている。底部外面の切り離し技法は、ヘラ切りであり摩耗している。
- 40 は壊の底部から体部にかけての破片である。外器面は回転ナデによって仕上げられている。内器面は回転ナデによって仕上げられ、炭化物の付着がみられる。底部外面の切り離し技法はヘラ切りである。
- 41 は壊の底部から体部にかけての破片である。外器面は回転ナデによって仕上げられ、底部から体部への立ち上がり部分をヘラ削りによって調整している。底部外面はヘラ切りのちナデによって仕上げられている。
- 42 は底部の破片である。内・外器面共に、回転ナデによって仕上げられている。底部外面の切り離し技法はヘラ切りであり、指頭圧痕を残す。



第13図 土師器（古代）実測図（1）

0 5 10cm



第14図 土師器（古代）実測図 (2)

0 5 10cm

43 は底部の破片である。外器面は回転ナデで仕上げられ、底部から体部への立ち上がり部分をヘラ削りによって調整している。内器面は回転ナデのちナデによって仕上げられている。底部外面の切り離し技法は不明で、組織痕らしき痕跡を残す。

44 は壺の底部から体部にかけての破片である。内・外器面共に回転ナデによって仕上げられ、底部から体部への立ち上がり部分をヘラ削りによって調整している。底部外面の切り離し技法はヘラ切りであり、板状圧痕らしき痕跡を残す。体部は丸みをもって立ち上がる。

45 は壺の底部の破片である。外器面は回転ナデによって仕上げられている。内器面は回転ナデのちミガキによって仕上げられ、炭化物の付着がみられる。底部外器面はヘラ切りのちナデによって仕上げられススの付着がみられる。体部は直線的に立ち上がる。

46 は底部の破片である。外器面は回転ナデによって仕上げられている。内器面は回転ナデのち不定方向のナデによって仕上げられている。底部外面はヘラ切りのちナデによって仕上げられている。

47 は壺の底部から体部にかけての破片である。外器面は回転ナデによって仕上げられ、凹凸を明瞭に残す。内器面も回転ナデによって仕上げられる。底部外面の切り離し技法は回転糸切りであり、ススの付着がみられる。体部は直線的に立ち上がる。壺bに該当するものと考えられる。

48 は甕の口縁部から頸部にかけての破片である。外器面は回転ナデによって仕上げられている。内器面は口縁部の上部が回転ナデにより、下部が横方向のナデによって仕上げられている。小破片の為、全体の形状は判然としない。

49 は甕の口縁部から頸部にかけての破片である。外器面は回転ナデによって仕上げられ、ススの付着がみられる。内器面は口縁部の上部が回転ナデにより、下部が下から上へのナデによって仕上げられている。小破片の為、全体の形状は判然としない。

50 は甕の口縁部の破片である。外器面は回転ナデによって仕上げられている。内器面は全体が回転ナデによって仕上げられ、一部、横方向のナデによって仕上げられている。小破片の為、全体の形状は判然としない。

51 は甕の口縁部の破片である。外器面は回転ナデによって仕上げられ、部分的に粘土の付着がみられる。内器面は口縁部の上部が回転ナデのち不定方向のナデにより、下部がナデによって仕上げられている。小破片の為、全体の形状は判然としない。

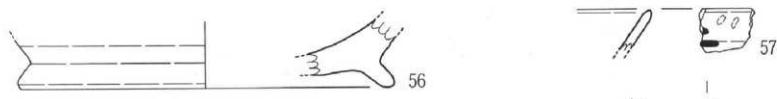
52 は甕の口縁部の破片である。外器面は回転ナデによって仕上げられている。内器面は丹塗りでミガキによって仕上げられている。

53 は鉢の口縁部から体部にかけての破片である。外器面はナナメ又は横方向のミガキによって仕上げられている。内器面は丁寧なナデによって仕上げられ、一部は剥落している。

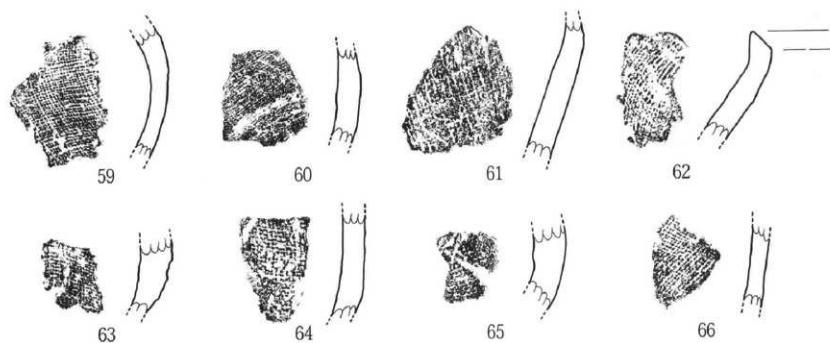
54 は蓋の口縁部の破片である。内・外器面共に口縁端部は回転ナデによって仕上げられ、それ以外の部分は回転ナデのちミガキによって仕上げられている。

55 は甕の底部から体部にかけての破片である。外器面は丁寧なナデによって仕上げられ、部分的にハケ目調整の痕を残す。内器面は底の肥厚している部分を横方向のミガキにより、上部をナナメ方向のミガキによって仕上げられている。底部外面はミガキによって仕上げられている。

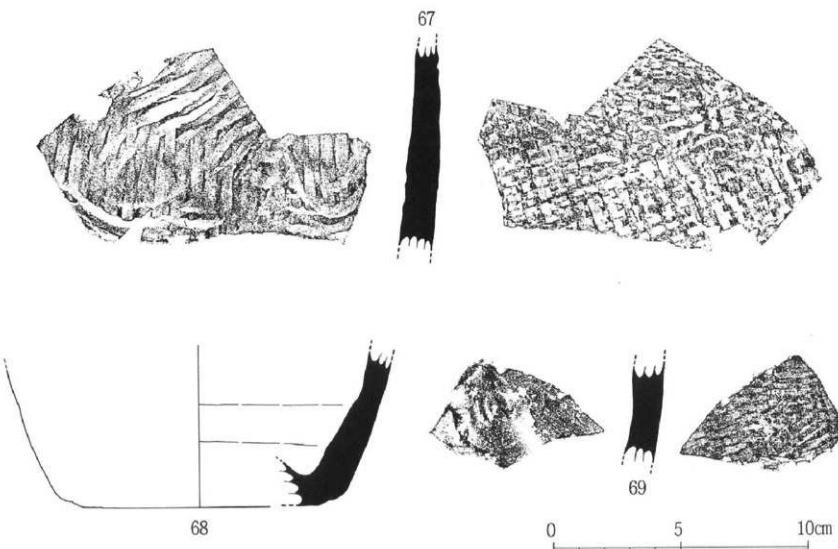
56 は底部の破片である。外器面は回転ナデによって仕上げられている。内器面は丁寧なナデによって仕上げられている。貼り付け高台である。小破片の為、全体の形状は判然としない。



第15図 土師器(古代)実測図(3)



第16図 製塙土器実測図



第17図 須恵器実測図

古代（第15・16・17図）

57 は口縁部の破片である。内・外器面共に回転ナデによって仕上げられている。外面には墨書があり、文字の判読は不可能である。小破片の為、器種は不明。

58 は体部の破片である。内・外器面共に回転ナデによって仕上げられている。外面には墨書があり、文字の判読は不可能である。小破片の為、器種は不明。

59 は焼塩壺の体部片である。内器面に布目痕を留めるが摩耗している。小破片の為、傾きおよび形態については、不明である。

60 は焼塩壺の体部片である。外器面は摩耗している。内器面には布目痕跡を留めるが摩耗している。小破片の為、傾きおよび形態については、不明である。

61 は焼塩壺の体部片である。外器面は摩耗している。内器面には布目痕跡を留めるが摩耗している。小破片の為、傾きおよび形態については、不明である。

62 は焼塩壺の口縁部片である。外器面は摩耗している。内器面には布目痕跡を留める。体部は直線的に開き、口縁部分で垂直に立ち上がる。器形は逆円錐形になると思われ、宮崎県内で一般的に出土するIIIa類（逆円錐形を呈する型作りによる焼塩土器で、器面調整は外側指押えで、内面には布目を留める。法量は器高10cm前後・口径13cm前後で、口唇部がシャープなもの）に該当するものと思われる。

63 は焼塩壺の体部片である。内器面に布目痕跡を留めるが摩耗している。小破片の為、傾きおよび形態については、不明である。

64 は焼塩壺の体部片である。内器面に布目痕跡を留めるが摩耗している。小破片の為、傾きおよび形態については、不明である。

65 は焼塩壺の体部片である。内器面に布目痕跡を留めるが摩耗している。小破片の為、傾きおよび形態については、不明である。

66 は焼塩壺の体部片である。内器面に布目痕跡を留める。小破片の為、傾きおよび形態については、不明である。

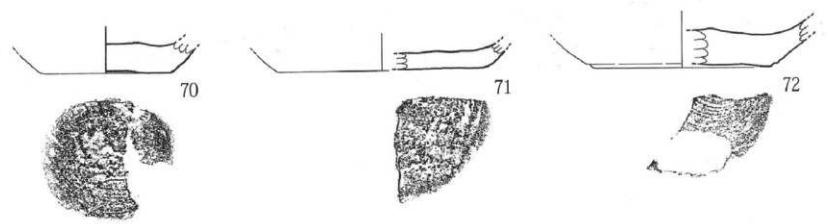
67 は壺の胴部片である。外器面に格子目タタキ痕跡を留める。内器面には同心円當て具のち平行當て具痕跡を留める。傾きは不明である。

68 は壺の底部から体部にかけての破片である。内・外器面共に、回転ナデによって仕上げられ、底部外面は部分的に粘土の付着がみられる。底部内面は回転ナデ時の粘土の盛り上がりがみられる。

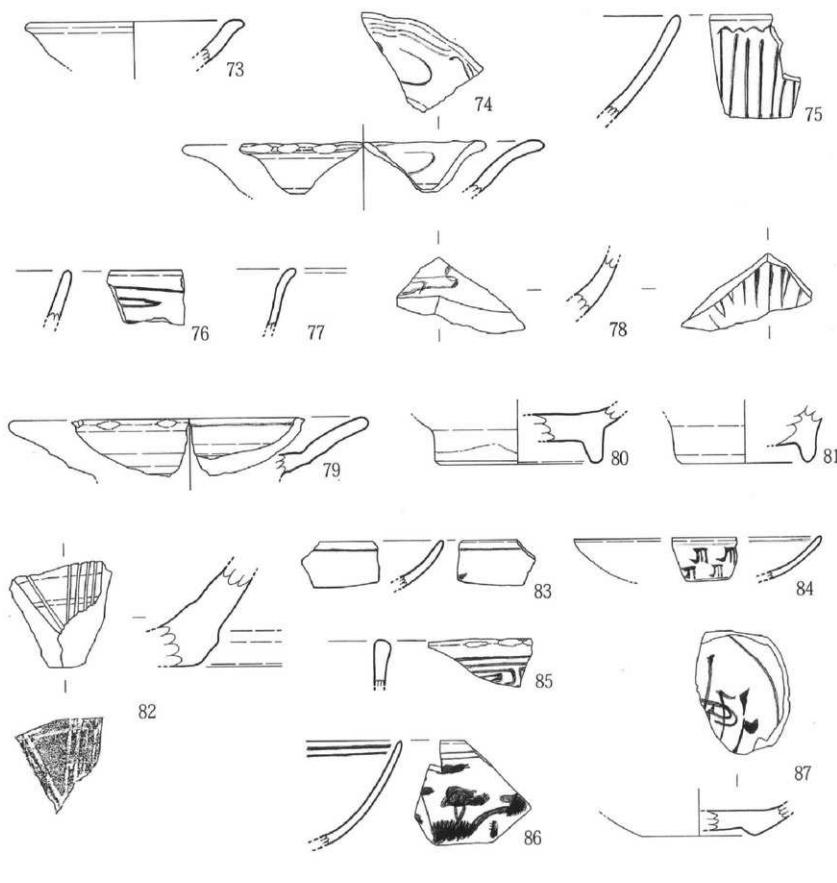
69 は壺の胴部片である。外器面に不定方向の平行タタキを留める。内器面は同心円當て具痕のちナデによって仕上げられている。傾きは不明である。

註1：製塩土器の分類は「製塩土器からみた律令期集落の様相（製塩土器の形態分類）」（小田和利 1996）に依る

註2：土師器の器種分類は「一中世食文化の基礎的研究－ 中世食器の地域性〈九州・南西諸島〉〈土師器食膳具・貯蔵具の器種分類〉」（山本信夫・山村信榮 1997）



第18図 土師器（中世）実測図



第19図 中世陶磁器実測図

70 は土師器の底部片である。内・外器面共に回転ナデによって仕上げられている。底部外面の切り離し技法は、糸切りである。また内面にススの付着がみられる事から、灯明皿である可能性が考えられる。

71 は土師器の底部片である。内・外器面共に回転ナデによって仕上げられている。底部外面の切り離し技法はヘラ切りである。小片の為、器種については不明。

72 は土師器の底部片である。内・外器面共に回転ナデによって仕上げられている。底部外面の切り離し技法は糸切りである。小片の為、器種については不明。

73 は青磁の口縁部片である。口縁端部はやや外反している。龍泉窯系青磁Ⅲ類に該当するものと考えられる。

74 は青磁輪花皿の口縁部から体部にかけての破片である。体部は直線的に広がり、口縁端部は外反している。

75 は青磁劍先連弁文椀の口縁部から体部にかけての破片である。体部はやや丸みをおびながら立ち上がる。16世紀の龍泉窯系産と思われる。

76 は青磁の口縁部の破片である。外面には雷文帯が施されてある。16世紀の龍泉窯系産と思われる。小片の為、器種は不明である。

77 は青磁の口縁部から体部にかけての破片である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は外反している。小片の為、器種および年代は不明である。

78 は青磁椀の体部片である。外面には連弁文が施されてある。12世紀前半、初期龍泉窯系青磁Ⅰ類に該当するものと考えられる。小片の為、傾きは不明である。

79 は青磁輪花皿の口縁部から底部にかけての破片である。体部から口縁部は外反しながら広がる。外面には、部分的に胎土の付着がみられる。内面の見込み部分は、蛇の目釉剥ぎが施されている。

80 は青磁の底部片である。貼り付け高台の疊付部分外側に、ケズリ痕跡を残す。また、高台部の下半分は無釉である。

81 は青磁の底部片である。底部外面に同心円状に釉の搔き取り痕および目積み痕跡を残す。

82 は備前焼播鉢の底部から体部にかけての破片である。小片の為、法量および櫛目の条数など不明である。底部から体部への立ち上がり部分に段がある。

83 は染付皿の口縁部から体部にかけての破片である。内・外面に呉須で下絵がつく。

84 は染付皿の口縁部から体部にかけての破片である。内・外面に呉須で下絵がつく。

85 は染付の口縁部片である。外面に雷文帯が施文されている。口唇部の一部が剥落している。小片の為、傾きおよび器種は不明である。

86 は染付椀の口縁部から体部にかけての破片である。内・外面に呉須で下絵がつく。

87 は染付の底部片である。見込み部分に呉須で下絵がつく。底部外面の形状は碁笥底である。16世紀前半の中国産と思われる。

註：青磁分類は「太宰府土器形式と国産陶器・貿易陶磁器編年」（山本信夫 1988）による

近世（第20図）

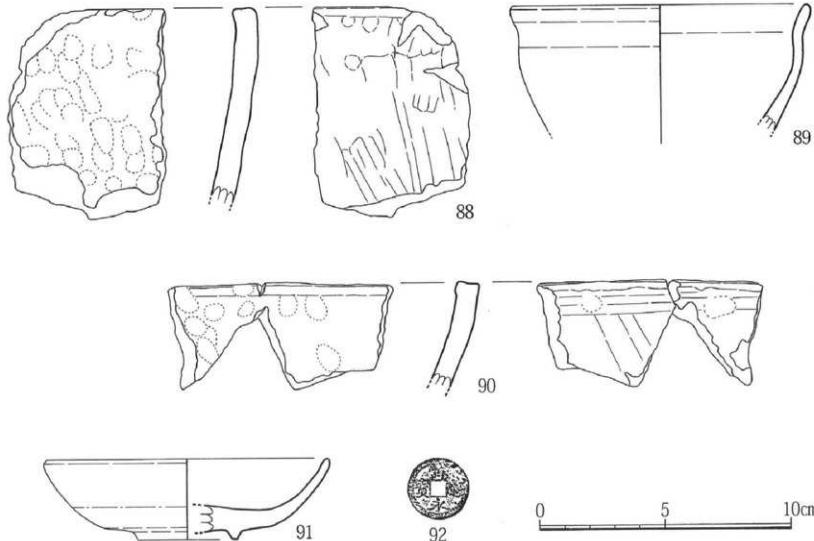
88 は瓦質土器の口縁部から体部にかけての破片である。外器面は口縁端部がヨコナデのちタテ方向のナデにより、体部がミガキのちタテ方向のナデによって仕上げられている。内器面は横方向の工具ナデによって仕上げられ、指頭圧痕を残す。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口縁端部の内側がやや肥厚する。小片の為、器高および口径は不明であるが、器種は釜ではないかと思われる。

89 は陶器椀の口縁部から体部にかけての破片である。内・外面共に施釉され、外面の一部が無釉である。体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は「く」の字状に広がる。瀬戸・美濃系で17世紀前半と思われる。

90 は瓦質土器の口縁部から体部にかけての破片である。外器面は口縁端部がヨコナデにより、体部がナナメ方向のナデによって仕上げられる。内器面は横方向の工具ナデによって仕上げられる。内・外器面共に、指頭圧痕を残す。小片の為、器高および口径は不明であるが、器種は88と同じく釜ではないかと思われる。

91 は陶器皿の口縁部から底部にかけての破片である。外面の口縁部周辺は施釉され、体部から底部にかけては無釉である。内面は全体に施釉される。また、外器面の高台部から体部の立ち上がり部分にかけてヘラ削りの痕跡を残す。唐津焼（皮鯨手）で1600～1610年代と思われる。

92 は寛永通宝で、I期の古寛永に該当し、鋳造年代は1636～1659年である。



第20図 近世陶磁器・錢貨実測図

表1 掘載遺物観察表(1)

番号	出土地区	種別	種類	部位	出土層位	法量(cm)		色 調		胎 土	備 考
						口径	底径	器高	外 面		
1 C-3	石 器				第IV層						
2 D-3	縄文土器		甄 部	第IV層				褐色～褐灰色	にぶい黄褐色～ にぶい褐色	1mm以下の黒色・透明 鉱物を含む	
3 B-4	縄文土器	深鉢	口縁部	第IV層				明赤褐色	明赤褐色	3mm以下の鉱物を含む	市来式土器
4 C-2	縄文土器		口縁部	第二層				暗赤褐色	黒褐色	1mm以下の鉱物を含む	
5 B-4	軽石製品				第IV層						陰陽石？
6 D-3	弥生土器	甕	口縁部	第IV層	29.8			にぶい黄褐色～ 灰黄褐色	にぶい黄褐色～ にぶい黄褐色	5mm以下の鉱物を含む	(反転復元)
7 B-4	弥生土器	甕	口縁部	第IV層	23			にぶい黄褐色～ 橙色	にぶい黄褐色～ 橙色	2mm以下の鉱物を含む	外器面にスス付着 (反転復元)
8 B-3	弥生土器	甕	口縁部	第IV層	26.2			にぶい黄褐色～ 灰黄褐色	にぶい黄褐色～ 灰黄褐色	3mm以下の鉱物を含む	(反転復元)
9 C-4	弥生土器	鉢	口縁部	第IV層	27.2			暗褐色～黒褐色	橙～黒褐色	2mm以下の鉱物を含む	(反転復元)
10 C-3	弥生土器		口縁部	第IV層				にぶい褐色	明褐色	3mm以下の鉱物を含む (全表面含む)	
11 C-3	弥生土器	甕	口縁部	第IV層	13.2			灰褐色	にぶい褐色	4mm以下の鉱物を含む	内・外器面にスス付着 (反転復元)
12 C-3	弥生土器		口縁部	第IV層				黒褐色	にぶい黄褐色	2mm以下の鉱物を含む	
13 B-4	弥生土器	甕	胸 部	第IV層				橙色	黄灰色	3mm以下の鉱物を含む	
14 C-3	弥生土器	甕	胸 部	第IV層				暗灰黃～黒色	にぶい黄褐色～ 黑色	2mm以下の鉱物を含む	内・外器面にスス付着
15 C-4	弥生土器	甕	脛 部	第IV層				灰黃褐色	にぶい褐色	6mm以下の鉱物を含む	外器面にスス付着
16 B-4	弥生土器	甕	底 部	第IV層	7.8			にぶい黄褐色～ 橙色		3mm以下の鉱物を含む	外器面にスス付着 (反転復元)
17 C-4	弥生土器		底 部	第IV層	11			にぶい褐色		3mm以下の鉱物を含む	(反転復元)
18 B-3	弥生土器		底 部	第三層	6.2			にぶい黄色	にぶい黄褐色	4mm以下の鉱物を含む	(反転復元)
19 C-2	弥生土器		底 部	第IV層	8.2			にぶい黄褐色		5mm以下の鉱物を含む	(反転復元)
20 E-3	弥生土器		底 部	第三層				灰黃褐色	にぶい褐色	3mm以下の鉱物を含む	(反転復元)
21 一括	土師器	口縁部	一 括					にぶい褐色	にぶい褐色	2mm以下の鉱物を含む	
22 C-4	土師器	口縁部	第三層					にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の鉱物を含む	
23 E-3	土師器			第IV層				にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3mm以下の鉱物を含む	
24 B-3	土師器			第三層				浅黄褐色	浅黄褐色	1mm以下の鉱物を含む	外器面にスス付着
25 C-2	土師器		底 部	第IV層	7.2			にぶい黄褐色～ 橙色	明赤褐色	2mm以下の鉱物を含む	
26 E-3	土師器	蓋	第IV層	26.6	11.5			にぶい黄褐色～ にぶい黄褐色	にぶい黄褐色～ にぶい黄褐色	2mm以下の鉱物を含む	内器面に炭化物? 付着
27 一括	土師器	坏	口縁部	一 括	12.3			橙～ にぶい褐色	にぶい褐色	1mm以下の鉱物を含む	(反転復元)
28 C-4	土師器	坏	口縁部	第IV層	16.4			浅黄褐色	浅黄褐色	0.5mm以下の鉱物を含む	(反転復元)
29 C-3	土師器	坏	口縁部	第IV層	14.1			にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3mm以下の鉱物を含む	(反転復元)
30 D-2	土師器	碗	口縁部	第IV層	14.1			にぶい褐色～ にぶい黄褐色	にぶい褐色～ にぶい黄褐色	7mm以下の鉱物を含む	(反転復元)
31 C-3	土師器	高台付椀	底 部	第IV層	7.2			橙～ にぶい黄褐色	橙色	2mm以下の鉱物を含む 微小の金糸母を含む	(一部反転復元)
32 D-3	土師器	高台付坏	底 部	第三層	7.3			にぶい黄褐色～ にぶい褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の鉱物を含む 微小の金糸母を含む	(反転復元)

表2 掲載遺物観察表(2)

番号	出土地区	種別	器種	部位	出土層位	法量(cm)		色調		胎土	備考
						口径	底径	器高	外而		
33 C-2	土師器	环	底部	第IV層		6.6		橙～にぶい黄褐色	橙～にぶい黄褐色	1mm以下の鉱物を含む 微小の金雲母を含む	(反転復元)
34 C-4	土師器	环	底部	第IV層		7.6		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	4mm以下の鉱物を含む 微小の金雲母を含む	(反転復元)
35 D-3	土師器	环	底部	第IV層				にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の鉱物を含む 微小の金雲母を含む	(反転復元)
36 C-3	土師器	环	底部	第IV層		6.2		にぶい黄褐色～ にぶい褐色	にぶい黄褐色～ にぶい褐色	1mm以下の鉱物を含む	(反転復元)
37 B-4	土師器	环	底部	第IV層		6.4		にぶい黄褐色～ にぶい褐色	浅黄褐色	0.5mm以下の鉱物を含む 微小の金雲母を含む	
38 C-2	土師器	环	底部	第IV層		5.6		にぶい黄褐色	浅黄褐色	1mm以下の鉱物を含む 微小の金雲母を含む	(反転復元)
39 B-4	土師器	环	底部	第IV層		6.4		灰白～ 浅黄褐色	灰白色	0.5mm以下の鉱物を含む 微小の金雲母を含む	(反転復元)
40 B-4	土師器	环	底部	第IV層		6.5		にぶい褐色～ にぶい黄褐色	橙～ にぶい黄褐色	2mm以下の鉱物を含む 微小の金雲母を含む	(反転復元)
41 C-4	土師器	环	底部	第IV層		7		暗黄褐色～ 灰黄色	暗黄褐色～ にぶい黄褐色	3mm以下の鉱物を含む 全体に微小の鉱物を含む	
42 C-3	土師器	环	底部	第IV層		7.3		橙～ にぶい褐色	橙～ にぶい黄褐色	2mm以下の鉱物を含む 微小の金雲母を含む	
43 B-4	上師器	底	底部	第II層		7.1		浅黄褐色	浅黄褐色	0.5mm以下の鉱物を含む 微小の金雲母を含む	(反転復元)
44 一括	上師器	环	底部	第IV層		5		橙～ にぶい黄褐色	にぶい褐色	1mm以下の鉱物を含む 微小の金雲母を含む	
45 E-3	土師器	环	底部	第III層		6.6		橙～ にぶい褐色	橙～ にぶい褐色	5mm以下の鉱物を含む 微小の金雲母を含む	(反転復元)
46 B-3	土師器	环	底部	第IV層		5.8		オリーブ黒～ 黄灰色	灰～黄灰色	0.5mm以下の鉱物を含む 微小の金雲母を含む	(反転復元)
47 C-2	土師器	环	底部	第IV層		5		にぶい褐色	にぶい褐色～ にぶい黄褐色	2mm以下の鉱物を含む 微小の金雲母を含む	(反転復元)
48 一括	土師器	蓋	口縁部	第IV層	23.6			にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の鉱物を含む 白色・透明鉱物を含む	(反転復元)
49 E-3	上師器	蓋	口縁部	第IV層	22.6			橙色	橙色	3mm以下の鉱物を含む 微小の金雲母を含む	(反転復元)
50 B-3	土師器	蓋	口縁部	第IV層				にぶい褐色	にぶい褐色	0.5mm以下の鉱物を含む 微小の金雲母を含む	
51 D-3	土師器	蓋	口縁部	第IV層				にぶい褐色	にぶい黄褐色	5mm以下の鉱物を含む 微小の金雲母を含む	
52 C-4	土師器	蓋	口縁部	第III層 第IV層				にぶい黄褐色	丹塗り 褐色	1mm以下の鉱物を含む	180,182が接合 (反転復元)
53 E-3	土師器	鉢	口縁部	第IV層	25			にぶい黄褐色	にぶい黄褐色～ 鉄灰色	1mm以下の鉱物を含む	(反転復元)
54 C-3	土師器	蓋	口縁部	第IV層				にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	0.5mm以下の鉱物を含む	
55 C-4	上師器	瓶	底部～ 体部	第IV層	22.4			にぶい黄褐色	灰黃褐色	2mm以下の鉱物を含む 白色・透明鉱物を含む	(反転復元)
56 E-3	上師器	瓶	底部	第IV層	15			にぶい褐色	にぶい褐色	3mm以下の鉱物を含む 微小の金雲母を含む	(反転復元)
57 B-4	土師器	口縁部	第IV層					にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	0.5mm以下の鉱物を含む 外器面に墨書きあり	
58 C-2	土師器	体	部	第III層				にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1mm以下の鉱物を含む 外器面に墨書きあり	
59 C-4	土師器	蓋	体	部	第IV層			橙色	橙色	4mm以下の鉱物を含む 内器面に布痕あり (焼き不明)	
60 E-3	土師器	蓋	体	部	第III層			橙色	橙色	1mm以下の鉱物を含む 内器面に布痕あり (焼き不明)	
61 E-3	土師器	蓋	体	部	第III層			橙色	橙色	4mm以下の鉱物を含む 内器面に布痕あり (焼き不明)	
62 C-3	土師器	蓋	口縁部	第IV層				橙色	橙色	3mm以下の鉱物を含む 内器面に布痕あり (焼き不明)	
63 C-4	上師器	蓋	体	部	第III層			橙色	橙色	5mm以下の鉱物を含む 内器面に布痕あり (焼き不明)	
64 C-3	上師器	蓋	体	部	第III層			橙色	橙色	0.5mm以下の鉱物を含む 内器面に布痕あり (焼き不明)	

表3 掘載遺物観察表(3)

番号	出土地区	種別	器種	部位	出土層位	法量(cm)			色調		胎土	備考
						口径	底径	器高	外 面	内 面		
65	D-3	土師器	壺	体部	第Ⅲ層				橙色	橙色	0.5mm以下の鉱物を含む	内器面に布痕あり (傾き不明)
66	C-2	土師器	壺	体部	第Ⅲ層				橙色	橙色	1mm以下の鉱物を含む	内器面に布痕あり (傾き不明)
67	D-3	須恵器	甕	体部	第Ⅲ層							154, 155が接合 (傾き不明)
68	E-3	須恵器	壺	底部	第IV層	11.5						(反転復元)
69	C-4	須恵器	甕	体部	第IV層							(傾き不明)
70	C-2	土師器	皿	底部	第IV層	5.2		にぶい橙～ にぶい黄褐色	にぶい黄橙色			内器面にスス付着
71	C-2	土師器	坏	底部	第Ⅲ層	8.6		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色			(反転復元)
72	D-2	土師器	坏	底部	第IV層	7.2		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色			外器面にスス付着 (反転復元)
73	C-3	青 磁	皿	口縁部	第Ⅲ層	8.6						(反転復元)
74	C-2	青 磁	皿	口縁部	第Ⅲ層	14.4						輪花皿 (反転復元)
75	一括	青 磁	椀	口縁部	第Ⅲ層							通井文16c
76	一括	青 磁		口縁部	一括							雷蒂文16c
77	D-2	青 磁		口縁部	第Ⅲ層							
78	B-4	青 磁	椀	体部	第Ⅲ層							通井文12c前半 (傾き不明)
79	一括	青 磁	皿	口縁部	第Ⅲ層	14.2						輪花皿 (反転復元)
80	D-2	青 磁	碗	底部	第IV層		6.6					高台貼り付け (反転復元)
81	C-3	青 磁	椀	底部	第Ⅲ層		5.6					(反転復元)
82	D-2	陶 器	鉢	底部	第IV層							備前描鉢
83	D-2	磁 器	皿	口縁部	第Ⅲ層							染付
84	一括	磁 器	皿	口縁部	一括	9.8						染付
85	D-2	磁 器		口縁部	第Ⅲ層							染付
86	D-2	磁 器	椀	口縁部	第Ⅲ層							染付
87	一括	磁 器	椀	底部	第Ⅲ層		4.6					青花16c前半 (反転復元)
88	D-2	瓦質土器	釜?	口縁部	第IV層							401, 403が接合
89	B-4	陶 器	椀	口縁部	第Ⅲ層	12						瀬戸美濃17c前半 (反転復元)
90	D-2	瓦質土器	釜?	口縁部	第Ⅲ層 第IV層							152, 231が接合
91	C-3	陶 器	皿	口縁～ 底部	第Ⅲ層	11.4	3.2	4				唐津皮輪1600～ 1610(反転復元)
92	E-3	錢			第IV層							寛永通宝 1636～1659

第IV章 小結

1.まとめ

ここで、調査結果を簡単ではあるがまとめてみたいと思うが、そのまえに、一部概要でも述べたが、今回調査区が限られた狭い範囲であり、さらに旧木造校舎から鉄筋コンクリート校舎への建て替えの際にできた瓦礫を埋め込んだ穴及び、除去されずに残ったままの旧木造校舎の基礎ブロック、旧校舎の校庭に植えられていた大木の抜根跡が調査区内の辺り一面にあり、また調査時点ではまだ使用されていた污水管などもあり、実質的調査面積をより狭くし、またそれらの影響により遺構の残存状態もあまり良くなかった。また、前記した庭木の樹根の影響で、土壤分解が著しく、あちこちにシミの様に樹根の痕跡が広がっており、遺構検出及び判別は困難を極めた。結果、遺跡の全容・性格をとらえるのは、不可能であったことをまずは前記しておきたい。

それでは、各土層の上から順にみていくと、まず第IIa層および第IIb層であるが、これは両層の間に水田とりわけ乾湿田にみられる酸化鉄の沈着があった事から、近・現代の水田耕作土であると考えられる。昭和初頭まで水田であった事が、地元住民からの証言でも得られた。ここで、庄内中学校の歴史にも少し触れておくと、昭和22年終戦後の教育改革によって、新制中学校（木造校舎）が開校している。校舎自体は、太平洋戦争前（昭和1ヶタ）から在った青年学校をそのまま利用している。その後、鉄筋コンクリート製の建物に建て替えられたようである。第III層は、近世の遺物包含層であるが、黄橙色軽石（御池軽石）・白色軽石（桜島文明軽石）が攬拌され混在している状況ならびに土色・土質が、第IIa・IIb層に酷似している事から、水田耕作土である可能性がたかいと思われるが、自然科学分析（プランツ・オパール）を行っていないので、断定はできない。第IV層は、主として古墳時代から古代にかけての遺物包含層である。第V層からは、ほとんど遺物は出土せず、第V層上面付近に古墳時代から古代にかけての生活面があつたと思われる。

遺構については、第VI層上面、箇所により第VII層上面において、土坑3基・井戸2基・炉跡1基・pit群を検出した。井戸（SE01・02）の2基については、掘られた時期の前後関係は不明であるが、埋土の状況などから近世のほぼ同時期に廃棄され、埋没したものと考える。石突い炉（SK01）についても、SE01・02とほぼ同時期に廃棄されたとみられる。

今回、建物跡は前記の要因で確認に至らず、また溝も検出されなかつたが、近世の井戸・炉跡が存在している事から、その時代になんらかの生活スペースがあった事はまちがいないであろう。また、それらの遺構の直上には第III層が遺跡全体に堆積していた。先に、第III層は近世の水田耕作土である可能性を述べたが、もしそうであるなら、生活域であった場所を造成し、新田開発をおこなつたという事になるのである。なぜその必要性があったのだろうか。そこで、ひとつの仮説として、当時の藩財政問題がからんでいたのではないかと考えた。以下その検証例として、「都城と島津氏—都城の歴史と都城島津家のあゆみ」の中に興味深い記述があるので取り上げてみた。文中、山下真一氏は『近世の都城島津家と都城』と題しそ中の一節、「都城の石高と村々の変遷」で次のように述べてある。

「北郷家（都城島津家）は慶長四～五年（一五九九～一六〇〇）の庄内の乱において多大な戦功をおさめた。その功績によって、慶長五年に北郷家は祁答院から都城に復帰したのである。都城復帰後すぐの北郷家の領地には、志和池・山田・野々美谷は含まれておらず、遅れて同年一一月に宛われている『都城島津家史料三』九一号）。慶長一六年（一六一一年）には志布志の夏井村二二九石一五五が加増され（『都城島津家史料一』二号）、その翌年には、既出の地を含め都之城・高城・勝岡・山之口など四万一三一五石

一七〇を領した（『都城島津家史料一』三号）。その後、慶長一九年（一六一四）の島津家久による四分の一上知令によって、都城島津家は勝岡・山之口・高城郷（三六二六石余）を献上したが、慶長懲内検後の慶長二〇年知行目録をみると、北郷家は四万四四〇〇石余を宛われている（『都城島津家史料一』四号）。つまり支配領域は減少したものの領地高は増加しているのである。これは、慶長内検が徳川政権における家格上昇のために過酷な打ち出しを図ったこと、太閤検地による家臣団の不満を緩和するために高一石の操作を行って「加増」したからであった。したがって、このように支配領域を減少させたのに、持高が増加するという現象が起きたのである。ただ、このことは必然的に藩財政の強化という当初の目的を不十分なものにしてしまった。加えて、上洛・出府による出費、江戸桜田藩邸の火災等によって藩財政はさらに悪化していった。そこで、元和五年（一六一九）に再び上知令が出され（『大日本古文書島津家文書之三』一五四〇号）、これに伴って都城も元和六年には三万二三一石に持高が減少した（『都城島津家史料一』五号）。このように藩財政の悪化とともに藩は蔵入地の増加を目指して上知を繰り返し、これに合わせて都城島津家も漸次持高を減少させていったのである。しかし、近世後期以降になると領地高が増加している。これは、都城島津家が領内の生産力向上を目指して、灌漑施設の整備や新田開発等を行った結果であろう。

この一節と、先に述べた新田開発が関連しているかは、不明であるが、この様な時代背景があった事は確かである。

遺物に関しては、縄文後期の市来式土器から近世の薩摩焼に至るまで、各時代の遺物が多岐にわたって出土したのであるが、各遺物が小破片である、摩耗が激しい、集中域がない、各層にあらゆる時代の遺物が混在しているなどの事実から、二次的な遺物が多数を占めると思われる。しかし、大岩田村ノ前遺跡でも出土した弥生前期後半の亀ノ甲タイプの甕などは、地域におけるバリエーションの多様性を示す一例として、貴重な資料である。また、製塩土器（運搬用）の破片も出土している。近年、内陸部での製塩土器出土事例が、日々報告されており、今後ますます増えしていくものと思われ、新たな塩の流通ルートが解明されていく事であろう。

2. あとがき

今回、学校の校内を調査するにあたり、調査の前段階から、安全管理・現場管理面および授業への影響等を心配していたわけであるが、学校関係者ならびに周辺住民の方々に御理解、御協力をいただき無事に調査を完了する事ができました。この場を借りて御礼申し上げます。

また調査期間中において、真夏の太陽の下、校舎に囲まれ無風状態、炎熱地獄の様な現場で発掘作業に従事していただいた作業員の皆様、本当に疲れさまでした。

最後に、調査および報告書作成にあたり、御教示・御指導して頂いた、矢部喜多夫・栗畠光博・横山哲英各氏に、感謝の意を表します。

参考文献

- 山本信夫 1988 「太宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究IV』 日本中世土器研究会
- 山本信夫・山村信榮 1997 「中世食器の地域性〈九州・南西諸島〉」『中世食文化の基礎的研究』 国立歴史民俗博物館
- 小田和利 1996 「製塙土器からみた律令制廃落の様相」『九州歴史資料館研究論集21』 九州歴史資料館
- 大川清・鈴木公雄・工業普通 1999 「日本土器事典」 緑山閣
- 新富町教育委員会 1983 「遺跡跡」『新富町文化財調査報告書第2集』
- 太宰府市教育委員会 2000 「太宰府条坊跡XIV」『太宰府市の文化財第48集』
- 重永卓爾 1991 「大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書」『都城市文化財調査報告書14集』 都城市教育委員会

写 真 図 版



調査前全景



表土剥ぎ風景



瓦礫除去風景



SK01 検出状況（北から）



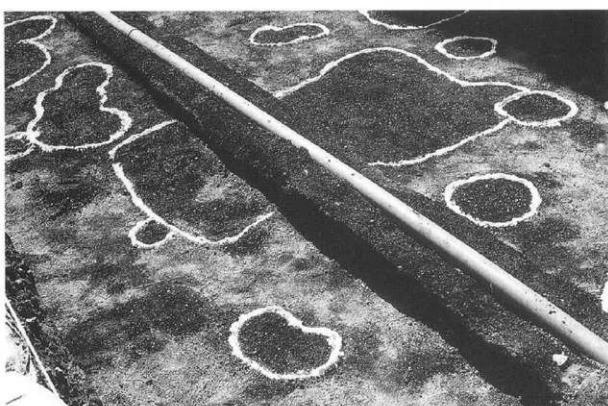
SK01 土層断面（北から）



SK01 完掘状況（東から）



第IV層内土器出土状況



D-E-3 区遺構検出状況



B-C-D-2 区遺構検出状況



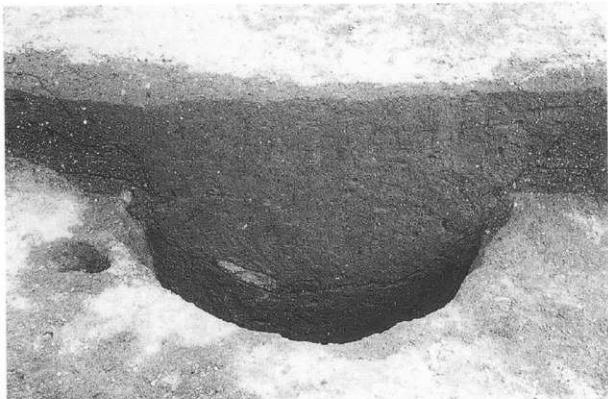
B・C-4 区遺構検出状況



SC02 完掘状況（東から）



SC03 半掘状況（南から）



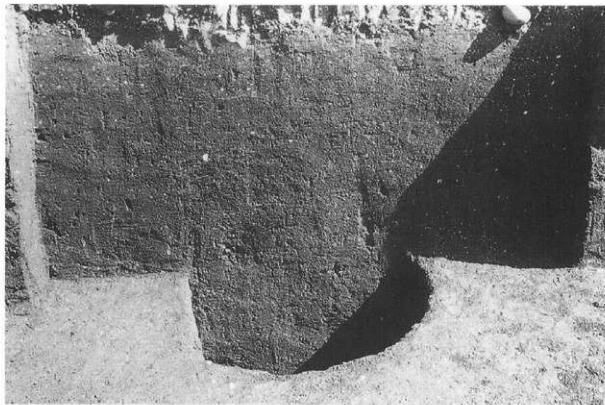
SE01 土層断面（北から）



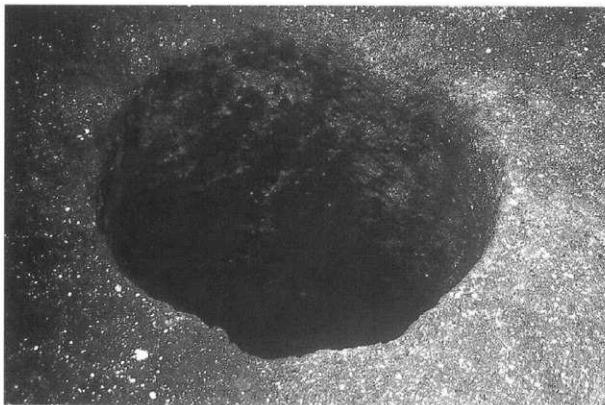
SE01 完掘状況（北から）



SE01 完掘状況（南から）



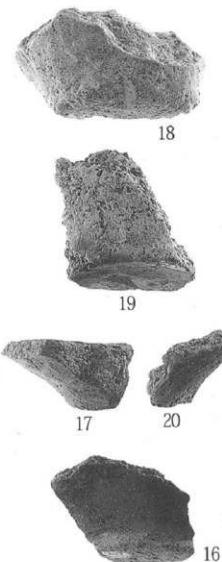
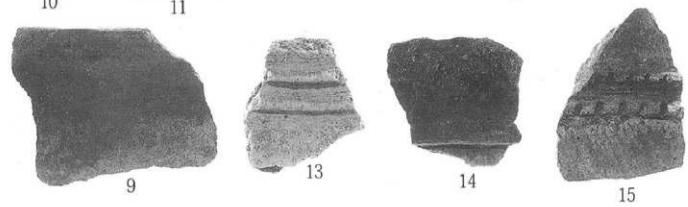
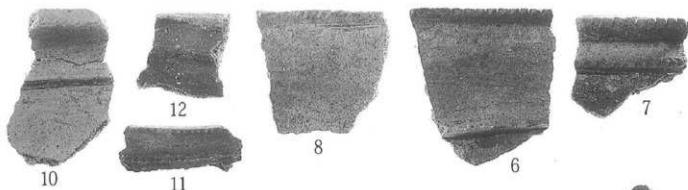
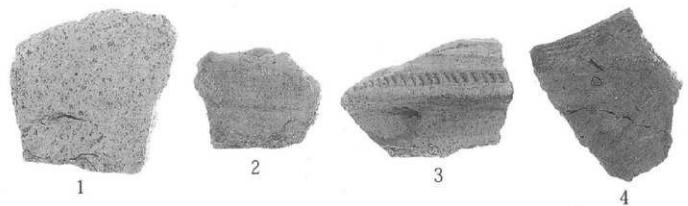
SE02 土層断面（北から）

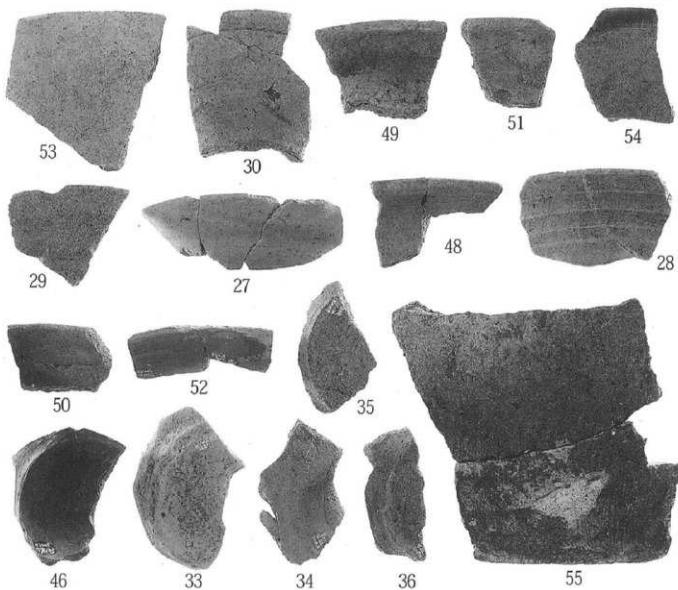
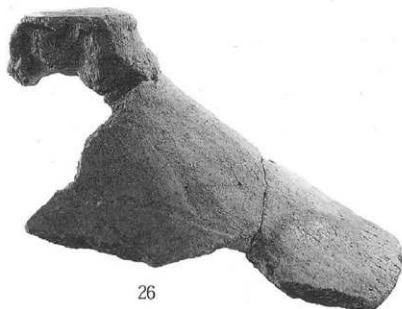
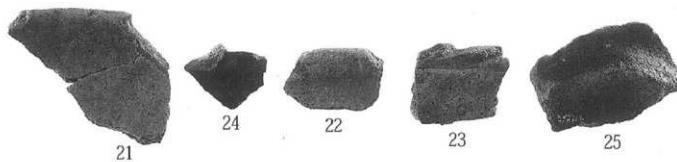


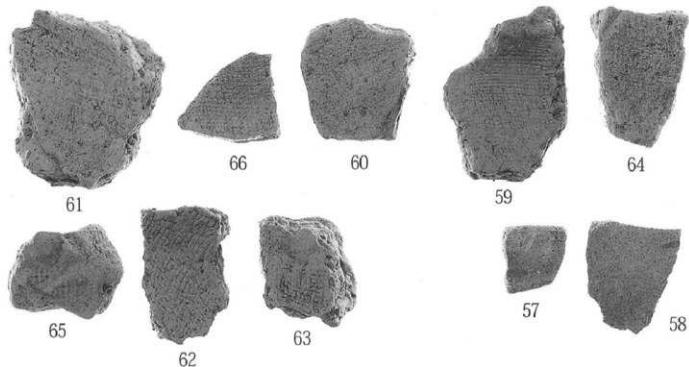
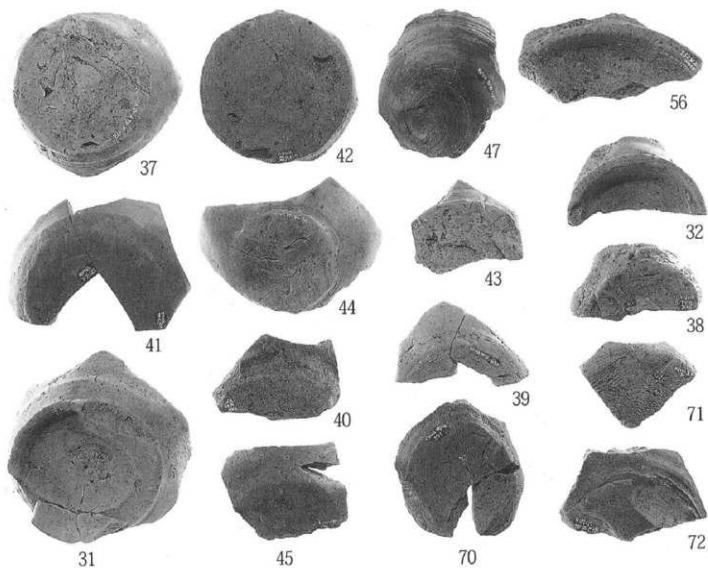
SE02 完掘状況（東から）

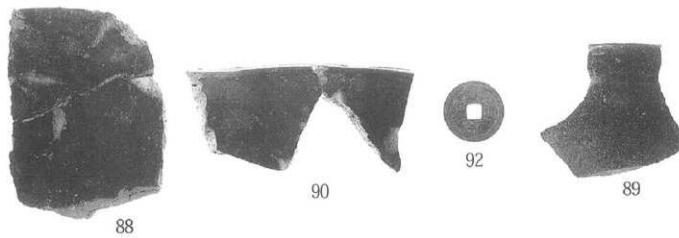
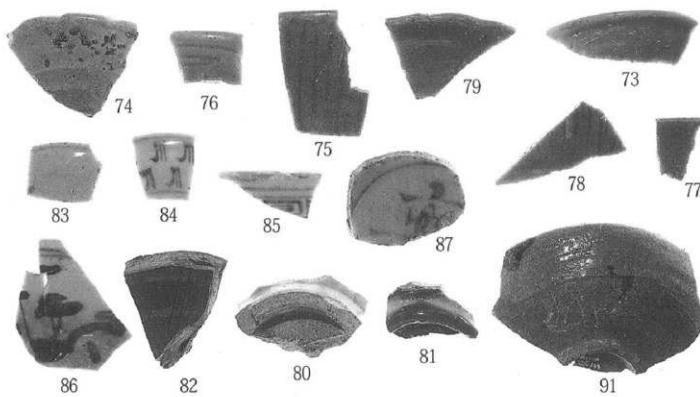
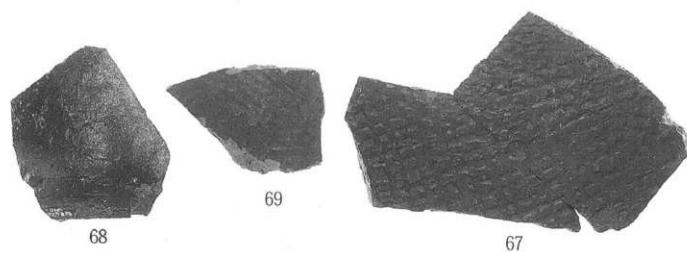


SE02 完掘状況（南から）









報告書抄録

フリガナ	クワパライセキ					
書名	桑原遺跡					
副書名	庄内中学校校舎建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ名	都城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第56集					
編集者名	下田代清海					
発行機関	宮崎県都城市教育委員会					
所在地	宮崎県都城市姫城町6街区21号					
発行年月日	2002年3月					
所収遺跡名	所在地	緯度	経度	調査期間	調査面積	調査原因
桑原遺跡	ミヤコノジヨウシジョウナイチヨウアザクワバラ 都城市庄内町字桑原	北緯31° 46' 20"	東経131° 01' 38"	2000年4月～ 2000年8月	500m ²	校舎改築
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		
集落	縄文時代～近世	柱穴・土坑・井戸		縄文土器・弥生土器・土師器・ 製塩土器・須恵器・陶磁器		

都城市文化財調査報告書第56集

桑原遺跡

2002年3月

編集 宮崎県都城市教育委員会
発行 ⑧885-8555 宮崎県都城市姫城町6街区21号
TEL(0986)23-9547 FAX(0986)24-1989

印刷 有限会社 都城新生社印刷
⑧885-0004 宮崎県都城市都北町7284-1
TEL(0986)38-3500 FAX(0986)38-4187